

非認知能力に関する自己評価シートの開発

中山 芳一・吉澤 英里

Development of self-assessment sheet for Non-cognitive skills

NAKAYAMA Yoshikazu・YOSHIZAWA Eri

<要 旨>

定量化による測定が困難とされる非認知能力に関して、自己評価による測定を試みるべく、その評価シートの開発を3つの段階を踏まえて精緻に行った。特に本研究では、非認知能力との親和性が高いキャリア教育に着目して、キャリア教育の一環として正課外活動（主に校友会クラブ活動）の支援に取り組む岡山大学の学生を予備調査の対象とした。当該学生たちによって予備調査用の質問項目を選定し、仮質問調査のための質問項目を精査した上で、まだ正課外活動に携わる前段階の年度当初の1学年の学生へ仮質問調査を行った。この仮質問調査の結果を分析して、3能力群各5項目、計15項目の非認知能力に関する自己評価シートを開発することができた。

<キーワード>

非認知能力、自己評価シート、自己維持・調整能力群、自己変革・向上能力群、他者協調・協働能力群

1. 本研究の目的

これまでも拙稿の中で取り上げてきた「非認知能力 (Non-cognitive skill)」は、幼保領域から小中高での学校教育、さらには放課後における教育福祉領域においてますます注目を集める能力概念となってきた。その背景には、Society5.0 や VUCA 時代と称される時代の加速度的な変化が見受けられ、個人的なレベルだけではなく制度的なレベルにおいても非認知能力を意識した動向が少なからず散見できる。とりわけ、幼稚園教育要領ならびに学習指導要領（いずれも文部科学省）にも「学びに向かう力・人間性等」として非認知的な能力の伸長を制度的に促そうとしている動向には、我が国の教育改革に対する姿勢も少なからず窺える。

しかしながら、経済学領域から生まれた「非認知能力」という概念は、心理学領域が意味する「認知」とは異なり、定量化できない能力の総称として位置づけられている。したがって、定量化できない能力のすべてが該当するため、例えば OECD（経済協力開発機構）が 2015 年に非認知能力として提示した「社会情動的スキル(Social and Emotional Skills)」よりも、さらに広範な範囲の能力を包含してしまう点が危惧されている。

ただし、これらの関係性を踏まえた上で、敢えて社会情動的スキルのように対自的かつ対他的な価値観や行動特性及び情動面にかかわる能力を非認知能力と置換するとしても、やはり定量化できないまたは困難な能力であることは明白といえる。そして、上述した定義とは矛盾し得るものの、現時点でも非認知能力を定量化する試みが活発に行われている状況にある。

このような経緯を踏まえて、本研究では非認知能力を客観的なレベルまで定量化するには到らないものの、自己評価による可視化を試みることにした。特に、これまでの拙稿による試み以上に、より一層統計的な手続きも取り入れ、質問項目を精査した自己評価シートの開発を行う。この非認知能力に関する自己評価シートを開発することで、学校教育及び高等教育機関、さらには社会人の人材育成などの多様な場面で非認知能力の可視化を援け、今後の教育・育成の改善へと活用されることを目指したい。

2. 研究方法

本研究では、非認知能力に関する自己評価シートを開発するために、以下の PHASE に従って進めることにした。なお、調査協力者は大学生に要請した。

特に、予備調査段階では非認知能力に関する行動指標を抽出するために、2011 年より岡山大学がキャリア教育の一環として位置付けてきた正課外活動（ここでは、校友会クラブ活動）に注力する大学生を調査協力者としている。当該学生たちが、正課外活動によって非認知能力を自ら伸ばしていることを前提に、自己客観視を通じて行動指標の抽出や精査を進めていった。

(1) PHASE1：予備調査 i

校友会クラブ活動の中で、文化系クラブ活動と体育系クラブ活動に所属する大学生 10 名（各 5 名）を対象に、予め 3 つのフレームワークで整理した非認知能力群として「①自分と向き合う力：対自的な自己維持・調整能力群」、「②自分を高める力：対自的な自己変革・向上能力群」、「③他者につながる力：対他的な他者協調・協働能力群」についての概要説明を行い、個々の観点から「クラブ活動を通して身につけた能力」を自由記述で尋ねる。

その記述内容を踏まえて、予備調査用の質問項目を選定する。

(2) PHASE2：予備調査 ii

校友会クラブ活動に所属する大学生 73 名（1 学年 6 名、2 学年 50 名、3 学年 16 名、4 学年 1 名／男性 50 名、女性 23 名）を対象に PHASE1 で選定した「大学でのクラブ活動で身につけた能力」に関する質問項目について予備調査を実施し、いずれの質問項目も 5 件法（1：全く身につけなかった～5：非常に身につけた）で回答を求めるとともに、文章の意味がわからない項目をチェックするように求める。その結果から、試行調査用の仮質問紙を作成する。

(3) PHASE3：仮質問紙による試行調査

上述の PHASE を経て作成した、仮質問紙による試行調査を行った。なお、ここまでは校友会クラブ活動に所属する在學生であったが、試行調査の対象者はまだ校友会クラブ活動に所属する前の入学直後の 1 学年の学生 2220 名に実施した。この試行調査の結果を踏まえて、因子分析を行い、当該質問項目について精査し、本質問用紙の開発を行う。質問項目への回答は 5 件法（1：とてもできている～5：まったくできていない）で求めた。

以上の 3 段階の PHASE によって、非認知能力に関する自己評価シートを開発し、以降の活用方法についても検討を進めることとした。

3. 研究結果

前節で示した各 PHASE についての結果は以下の通りとなった。

(1) PHASE1：予備調査 i についての結果

5 名の文化系学生たちからは、「①自分と向き合う力：対自的な自己維持・調整能力群」について 12 項目、「②自分を高める力：対自的な自己変革・向上能力群」について 13 項目、「③他者をつながる力：対他的な他者協調・協働能力群」について 29 項目の計 54 項目が挙げられた。同様に 5 名の体育系学生たちからは、「①自分と向き合う力：対自的な自己維持・調整能力群」について 18 項目、「②自分を高める力：対自的な自己変革・向上能力群」について 9 項目、「③他者をつながる力：対他的な他者協調・協働能力群」について 23 項目の計 50 項目が挙げられた（文化系学生ならびに体育系学生から挙げられた項目の例示については、【表 1】を参照されたい）。以上から、これらの項目を踏まえて計 99 項目を選定することができた。

【表 1】予備調査 i における項目内容の例示

能力群		文化系学生	体育系学生
①	自分と向き合う力：対自的な自己維持・調整能力群	<ul style="list-style-type: none"> ・自分にとって辛いことがあっても乗り越えることができる ・自分のスケジュールを管理することができる ・本番での緊張感をコントロールすることができる …などの <u>12 項目</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のやるべきことを明確にすることができる ・自分が担当する仕事に対して責任感を持つことができる ・部活動の優先順位を上げることができる …などの <u>18 項目</u>
②	自分を高める力：対自的な自己変革・向上能力群	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身についてほめることができる ・人の優れているところを模倣することができる ・お客様に喜んでもらえてうれしさを感じる …などの <u>13 項目</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・どうすれば上達できるのかを周囲に聞くことができる ・興味・関心を持つ分野の幅を積極的に広げることができる ・大会などの具体的な目標に向かって精進できる …などの <u>9 項目</u>
③	他者をつながる力：対他的な他者協調・協働能力群	<ul style="list-style-type: none"> ・周囲を見て的確な指示を出すことができる ・他者と情報の交換や共有をすることができる ・身振りや手ぶりなどの身体的な立ち振る舞い …などの <u>29 項目</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・イヤなことははっきりイヤだと言える ・他人に迷惑がかからないように意識して行動できる ・仲間を引っ張っていけるよう行動することができる …などの <u>23 項目</u>
合計項目数		54 項目	50 項目

(2) PHASE2：予備調査 ii についての結果

校友会クラブ活動に所属する大学生 73 名を対象に「大学でのクラブ活動で身についた能力」に関する計 99 の質問項目について予備調査を実施し、得られたデータから回答傾向に偏りが認められる項目を削除した。

さらに、文章がわかりづらいと思われるものについても削除した結果、各能力群に 10 項目、計 30 項目の質問項目を選定することができ、以下の 30 項目の仮質問紙を作成することができた。

- ① 自分と向き合う力：対自的な自己維持・調整能力群
 - 1 自分にとって辛いことや苦しいことがあっても耐えられる
 - 2 日常的に自分の体調を管理できる
 - 3 毎日のスケジュールを管理できる
 - 4 重要な場面で緊張感を上手にコントロールできる
 - 5 ストレスがたまらないように発散できる
 - 6 落ち込むようなことがあっても、再び気を取り直せる
 - 7 自分自身を慰めたり、励ましたりできる
 - 8 腹立ちやいら立ちを自分の中で抑えられる
 - 9 一度始めたことは、あきらめずに持続できる
 - 10 自分が使う道具や身の回りの物を大切に使える
- ② 自分を高める力：対自的な自己変革・向上能力群
 - 1 たとえ困難なことであっても、自分ならできると思える
 - 2 新しいことに積極的に挑戦できる
 - 3 一度始めたことをもっとやってみたいと思える
 - 4 日頃の努力を技術向上や課題解決につなげられる
 - 5 目標を達成したときに、喜びや高揚感を強く持てる
 - 6 何かに取り組んでいるときに楽しいと感じられる
 - 7 自分の興味・関心や視野を積極的に広げられる
 - 8 具体的に目標を設定して、その目標へ着実に向かえる
 - 9 いま取り組んでいることを、さらに改善しようと思える
 - 10 反省し改善するために日々の振り返りができる
- ③ 他者につながる力：対他的な他者協調・協働能力群
 - 1 初対面の人や自分と合いにくい人ともうまく付き合える
 - 2 礼儀やマナー、ルールを意識しながら行動できる
 - 3 相手の性格や考え方を理解しながらかわりができる
 - 4 仕事や所属する組織に対する責任感を強く持てる
 - 5 周囲の雰囲気などを感じ取りながら行動できる
 - 6 積極的に他者と意見交換や情報交換をできる
 - 7 いま、相手が何を思っているのか理解しようと思える
 - 8 集団の中で自分の役割を自覚しながら行動できる
 - 9 困っている人がいれば、すすんで助けようと思える
 - 10 たと言いつらいことであっても積極的に発信できる

(3) PHASE3：仮質問紙による試行調査についての結果

調査協力者 2220 名のうち、26 歳以上の者と回答に欠損がある者のデータを分析対象から除外した。さらに、質問項目のうち 90% (27 項目) 以上で同一の選択肢に回答している者のデータも回答の信頼性が疑われるため除外した。最終的な分析対象者は 1870 名 (男性 1041 名、女性 829 名、18-25 歳、平均 18.43 歳 ± 0.70 SD) であった。

<質問項目の検討> 項目ごとの平均と標準偏差を算出し、分布を確認した。その結果、2 項目 (②-5、②-6) で床効果が認められたため、以降の分析から除外した【表 2】。

【表 2】 仮質問紙 (30 項目) の記述統計

	項目	平均	標準偏差	平均+SD	平均-SD
①	1	2.35	0.95	3.29	1.40
	2	2.34	1.00	3.34	1.34
	3	2.49	1.06	3.55	1.44
	4	2.88	1.11	3.99	1.78
	5	2.59	1.08	3.67	1.51
	6	2.63	1.08	3.71	1.55
	7	2.52	1.04	3.56	1.49
	8	2.33	1.02	3.35	1.31
	9	2.58	1.05	3.63	1.52
	10	2.04	0.98	3.02	1.06
②	1	2.55	1.03	3.58	1.52
	2	2.53	1.06	3.59	1.47
	3	2.27	0.96	3.23	1.31
	4	2.37	0.92	3.29	1.45
	5	1.77	0.91	2.68	0.86
	6	1.78	0.88	2.66	0.90
	7	2.11	0.97	3.08	1.14
	8	2.49	0.97	3.46	1.51
	9	2.28	0.90	3.18	1.38
	10	2.59	1.01	3.60	1.58
③	1	2.66	1.16	3.81	1.50
	2	1.96	0.90	2.86	1.06
	3	2.11	0.92	3.03	1.19
	4	2.13	0.91	3.04	1.22
	5	2.00	0.89	2.89	1.11
	6	2.48	1.02	3.50	1.46
	7	2.10	0.90	2.99	1.20
	8	2.23	0.89	3.11	1.34
	9	2.19	0.91	3.09	1.28
	10	2.91	1.09	4.00	1.83

<因子分析> 28 項目に対して探索的因子分析を行った。最尤法 (プロマックス回転) を行い、仮説に基づき 3 因子とした。その結果、【表 3】に示す因子負荷量が示されたため、各因子について、因子負荷量が高いものから上位 5 項目を採用した。なお、各因子の回転前の固有値は 9.77、2.05、1.74 であった。各因子の Cronbach の α 係数は第 1 因子で .83、第 2 因子で .86、第 3 因子で .78 であった。質問項目の内容から、第 1 因子を「自分を高める力」、第 2 因子を「他者とつながる力」、第 3 因子を「自分と向き合う力」と命名した。探索的因子分析で得られた 3 因子モデルをもとに確認的因子分析を行った結果、適合度指

数は $X^2_{(87)} = 784.260$, CFI = .940, RMSEA = .065 であり、許容される水準の適合度であった。

<性差の検討> 因子分析の結果をもとに、3 因子のそれぞれに該当する質問項目の合計を算出した。得られた値について、性別ごとの平均と標準偏差を【表 4】に示す。t 検定の結果、「他者とつながる力」では女性の値が男性よりも値が低く ($t_{(1868)} = 2.74$, $p < .01$, $d = .12$)「自分と向き合う力」では男性の値が女性よりも低かった ($t_{(1868)} = 1.97$, $p < .05$, $d = .09$)。ただし、いずれも効果量は小 ($d < .20$) であった。

【表 3】 因子分析結果（最尤法 プロマックス回転 3 因子抽出）

No.	項目	因子1	因子2	因子3	共通性
第1因子 自分を高める力 ($\alpha = .83$)					
②-8	具体的に目標を設定して、その目標へ着実に向かえる	.75	.01	-.04	.53
②-4	日頃の努力を技術向上や課題解決につなげられる	.70	.08	-.02	.53
②-9	いま取り組んでいることを、さらに改善しようとする	.69	.11	-.08	.56
②-3	一度始めたことをもっと続けてみたいと思える	.65	.05	.01	.49
①-9	一度始めたことは、あきらめずに持続できる	.64	-.04	.02	.41
②-2	新しいことに積極的に挑戦できる	.63	-.02	.08	.48
②-1	たとえ困難なことであっても、自分ならできると思える	.59	-.04	.20	.46
②-10	反省し改善するために日々の振り返りができる	.56	.11	-.09	.40
②-7	自分の興味・関心や視野を積極的に広げられる	.50	.15	.02	.40
第2因子 他者とつながる力 ($\alpha = .86$)					
③-5	周囲の雰囲気などを感じ取りながら行動できる	-.06	.81	.01	.55
③-3	相手の性格や考えを理解しながらかかわることができる	-.03	.80	.02	.56
③-7	いま、相手が何を思っているのか理解しようとする	-.04	.79	.02	.55
③-2	礼儀やマナー、ルールを意識しながら行動できる	.03	.67	-.04	.45
③-8	集団の中で自分の役割を自覚しながら行動できる	.22	.56	.06	.54
③-4	仕事や所属する団体などに対して責任感を強く持てる	.24	.53	-.05	.47
③-9	困っている人がいれば、すすんで助けようとする	.28	.44	-.01	.43
③-6	積極的に他者と意見交換や情報交換をできる	.25	.40	.09	.50
第3因子 自分と向きあう力 ($\alpha = .78$)					
①-6	落ち込むようなことがあっても、気持ちを切り替えられる	-.06	-.01	.87	.54
①-7	自分のことを慰めたり、元気づけたりできる	.05	.01	.71	.48
①-5	ストレスがたまらないように発散できる	.01	-.04	.70	.41
①-8	腹立ちやいら立ちを自分の中で抑えられる	-.03	.26	.36	.27
①-1	自分にとって辛いことや苦しいことがあっても耐えられる	.33	.02	.35	.36
①-4	重要な場面で緊張感を上手にコントロールできる	.22	.10	.34	.32
③-1	初対面の人や合わないと思う人ともうまく付き合える	.14	.33	.18	.37
①-2	日常的に自分の体調を管理できる	.32	.06	.17	.33
③-10	たとえ言いづらいことであっても積極的に伝えられる	.33	.08	.16	.33
①-3	毎日のスケジュールを管理できる	.39	.11	.04	.36
①-10	自分が使う道具や身の回りの物を大切に使える	.19	.32	.00	.27
因子間相関行列					
	第1因子	1.00	.60	.44	
	第2因子		1.00	.38	
	第3因子			1.00	

注 最終版では質問項目①-8と①-1の文章を修正した。

【表 4】 各因子の記述統計と性差（*t*検定）

	男性		女性		<i>t</i> ₍₁₈₆₈₎	<i>p</i>	<i>d</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>			
自分を高める力	12.01	3.83	11.95	3.61	0.31		0.02
他者とつながる力	10.59	3.62	10.14	3.58	2.74	**	0.12
自分と向き合う力	12.26	3.80	12.61	3.74	1.97	*	0.09

注 得点が低いほど力が高い（とてもできている）ことを表す。

p* < .05, *p* < .01

以上の結果から、3つの非認知能力群に位置付けられた各10項目をさらに精査することができ、それぞれについて各5項目、計15項目にまで自己評価項目を選定した。また、表記についてもより自己評価をしやすくするために、修正を加えた結果、最終ページにある自己評価シートを開発することができた。

4. 総合考察及び今後の課題

(1) 総合考察

上述した通り、非認知能力はその定義からも、主観的かつ定性的な測定にならざるを得ない。その中で、より客観性を高めるためには、現時点ではパフォーマンス評価が多くの場合活用されているが、それだけでは見えにくい内面的な変化等の可視化は困難である。この点において、自己評価は表出した行為以外にも、自己の内面に迫ることができるという利点を有している。しかしながら、測定方法、とりわけ質問項目の設定によっては、測定者の恣意的な側面や調査対象者の主観的な側面によって大きく左右されることも否めないだろう。

本研究で開発した非認知能力に関する自己評価シートでは、予め対自的及び対他的な非認知能力を3つの枠組み（能力群）に整理しておいたことで、各能力群を横断するような質問項目の混在を可能な限り回避した点が特筆できる。この点では、PHASE1において調査対象者から出された項目を共通化（チャンクアップ）するだけでなく、予め設定した枠組みから具体化（チャンクダウン）するという双方向からのアプローチが適していたと考察できる。

また、PHASE2において偏りのあるものを除外した結果、99項目から30項目へと精査でき、PHASE3においてn数2000を上回る調査と因子分析による精緻な分析から15項目にまでブラッシュアップできた意義は大きい。これによって、今後の質問調査では膨大な質問項目数によって対象者の意欲や関心を低下させるような事態も回避できる。

以上から、本研究によって開発した3能力群、各5項目（15項目）の自己評価シートは、懸念され得る測定者の恣意的な側面と調査対象者の主観的な側面を部分的ではあるものの緩和することができたのではないだろうか。

(2) 今後の課題

しかしながら、今後本研究が取り組むべき主たる課題として、以下の3点を挙げるができる。

第一に、3能力群、各5項目（計15項目）に関して、前項では各能力群を横断した質問項目の混在や調査対象者の回答時における意欲・関心の低下を緩和できると、肯定的な意義を呈したが、今後はこの意義についてより一層質的かつ量的な妥当性を追求していく必要がある。この追及によって、非認知能力に関する自己評価シートのさらなる精査と確立を期待できる。

第二に、実際の調査結果によって、各能力群における総体的な評価が仮にポジティブな結果を出したとしても、この結果がそのまま肯定的に解釈できるかどうかの疑義である。言うまでもなく、自己評価であるために調査対象者本人の自己客観的な評価は、その時々本人の状況や感情・意思に影響されることは否めない。例えば、自らに対して謙虚で厳密な自己評価をしようとするれば、その意思に調査結果は反映されることとなるだろう。さらに、各能力群との関係性という点でも、総体的な結果と解釈とが一致しない場合があり得る。なぜなら、対自的な自己維持・調整能力群が低下することで、対自的な自己変革・向上能力群が向上することも想定できるからである。このように、能力群同士の関係性が必ずしも相互作用的になり得ないために、総体的な結果と解釈との不一致性にも考慮が求められる。その点では、各能力群の関係性についても言及していくことが課題として挙げられる。

第三に、上述した二つの課題とも関連しながら、非認知能力に関する自己評価シートの活用方法を明らかにしていかなければならない。当然のことながら、単なる格付け的な評価をすることが本シートの開発目的ではない。今後、対象者たちにますます求められる非認知能力の伸長のために、指導や支援をする実践者が対象者の現状を把握した上で、これまでの指導や支援を省察し、次への改善策を検討することが目的になるからである。したがって、対象者のどのような現状を把握したいのかを明確にして、それに応じた活用をすることが望ましい。この点を踏まえると、自己評価だけでなく教育目標や具体的な実践との密接な関係性も看過できない。

以上3点が、主だった今後の研究課題として挙げられる。上述した通り、非認知能力は、これまでも教育等の各フィールドにおいて抽象度の高いまま重視されてきた傾向があるが、今後は急速な時代の変化に伴って言語化・構造化が重視されるようになってきた。したがって、各領域で取り組まれてきた非認知能力に関する様々な研究に基づき、学際的に明らかにして、各フィールドへ還元することが今後ますます問われてくるだろう。

【引用文献・参考文献】

- ・ジェームズ・J・ヘックマン（大竹文雄解説、古草秀子訳）『幼児教育の経済学』東洋経済新報社、2015年
- ・遠藤利彦「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」『平成27年度プロジェクト研究報告書』国立教育政策研究所、2017年
- ・経済協力開発機構（OECD）編著、ベネッセ教育総合研究所企画・制作（無藤隆・秋田喜代美監訳）『社会情動的スキル—学びに向かう力』明石書店、2018年
- ・三浦孝仁、坂入信也、宮道力、中山芳一『大学生のためのキャリアデザイン—大学生をどう生きるか』かもがわ出版、2013年

- ・ダイアン・ハート著、田中耕治監訳『パフォーマンス評価入門―「真正の評価」論からの提案』ミネルヴァ書房、2012年
- ・中山芳一『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』東京書籍、2018年
- ・中山芳一『キャリア教育における多元的自己評価試論―非認知能力を手がかりとして―』岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要編集委員会「岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第1号」、2016年
- ・中山芳一『キャリア教育における多元的自己評価試論Ⅱ―2016年度の評価結果から―』岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要編集委員会「岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第2号」、2017年
- ・中山芳一『キャリア教育における多元的自己評価試論Ⅲ―2017年度の評価結果から―』岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要編集委員会「岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第3号」、2018年
- ・中山芳一「新しい能力の育成に関する一考察―大学のキャリア教育と小学生の放課後に焦点を当てて―」『大学教育研究紀要 第10号』、2014年

【自己評価シート；2019】

問)以下の質問項目について、現在のあなたはどれぐらいできていると思いますか？
 当てはまる数字一つに○をしてください。

No.		とてもできている				まったくできていない
1	辛いことや苦しいことがあってもいつも通りにふるまえる	1	2	3	4	5
2	ストレスがたまらないように発散できる	1	2	3	4	5
3	落ち込むようなことがあっても、気持ちを切り替えられる	1	2	3	4	5
4	自分のことを慰めたり、元気づけたりできる	1	2	3	4	5
5	腹立ちやいら立ちを抑え込んで耐えられる	1	2	3	4	5
6	一度始めたことは、あきらめずに持続できる	1	2	3	4	5
7	一度始めたことをもっと続けてみたいと思える	1	2	3	4	5
8	日頃の努力を技術向上や課題解決につなげられる	1	2	3	4	5
9	具体的に目標を設定して、その目標へ着実に向かえる	1	2	3	4	5
10	いま取り組んでいることを、さらに改善しようと思える	1	2	3	4	5
11	礼儀やマナー、ルールを意識しながら行動できる	1	2	3	4	5
12	相手の性格や考えを理解しながらかかわることができる	1	2	3	4	5
13	周囲の雰囲気などを感じ取りながら行動できる	1	2	3	4	5
14	いま、相手が何を思っているのか理解しようと思える	1	2	3	4	5
15	集団の中で自分の役割を自覚しながら行動できる	1	2	3	4	5

ご協力ありがとうございました